

【執筆者の紹介】

住 所 千葉県鴨川市東町五四七六番地

生年月日 大正九年十月十一日生

軍 歴 昭和十七年四月一日 樺太上敷香 歩兵第

二五運隊 現役兵入隊

昭和十七年七月一日 衛生兵転科

昭和二十年八月一日 陸軍衛生伍長

昭和二十年八月終戦 シベリア抑留生活

昭和二十四年十月三十一日 復員帰郷

入隊からシベリア抑留を顧みて

岐阜県 角 野 重 光

昭和十九年三月北部第三部隊（旭川）に入隊、同月二十七日深夜旭川護国神社を参拝、旭川駅を出発。列車は全部鎧戸を閉め、一路南へと進行、青函連絡船に乗り青森に到着。途中一部区間、鎧戸の開放命令の出る所もあり、窓からやっと外を眺めると朝方であった

が、農家の人が麦踏み場面もあり、やがて博多に到着。ここより船で釜山に着き、朝鮮を経て東満の理春部隊に四月三日夜八時ごろ到着。その年の八月、部隊は北満の佳木斯に移動。十一月、部隊にアマーバ赤痢がはやり、私もこの赤痢に罹り入院、二十年一月五日退院。

一月十日、部隊はカ号演習という名目で出動。これには一日でも病院に入った者はいれず、私は残留部隊として残され、その後混成部隊として結成した後で分かったのであるが、カ号演習で出動した本隊は台湾に出動したのであった。

その後、私たちは陣地警備歩哨として派遣。そして五月、部隊より演習方法が一部変わったとのことで、私たちは交代兵と代わり本隊に帰った。

そのうちに、どうも日ソ戦が近いうちに始まるかもしれないとの噂がたち始め、そうしているうちに、中隊長から、そのためには現在のこの兵舎では今年の冬は過ごせないで、今年の冬は山にトンネルを掘ってそれを兵舎にするのと言われ、先発隊としてK

班長以下十名が現地視察に行くことになり、翌日よいよ出発。

初めての土地で道も聞きながら進み、そのうちに馬に乗れる者がいないかとのことで、私は乗馬が得意なので申し出、他の中隊のB班長と二人で開拓団より馬を借り、山に登る。入口までの視察も終わり分隊に戻り再び行軍。途中幾度も休憩しながら小川を歩き、また山に登り、やっと目的地に辿りつき、一休憩してまず幕舎を造る者、飯盒で夕食の準備をする者と手分けし、やっと夕食を飯盒で分け合って食べた。狼の来襲予防のため、火を消さないように交代交代で火を焚く。すると深夜十一時過ぎ、近くでブッポウソウが鳴き始め、「ブッポブッポブッポソウ」と鳴き、いかにも疲れた我々を安らげてくれるような気がした。ブッポウソウの鳴き声を私たちは初めて聞いた。

やがて本隊も到着し、いよいよ作業が始まったが、何はさておいても第一に自分たちが寝起きする仮兵舎を造らなければならず、木を切り倒す者、それを運ぶ者、骨組を造る者、と分担し、やっと骨組みだけ出来、

今度は屋根を造るのに大変な苦勞。細かく木を並べ小さな枝を並べ、近くには屋根を覆うような草もないが、何をやるにも幹部の命令であるから、これでは駄目であると逆らうわけにもいかず、暑さをしのぐため、屋根に土を練ってのせるとのこと。土をのせるが、天気が続くとヒビ割れが生じ、雨が降り出すとだら漏りの状態で、あちらでも、こちらでも大騒ぎ。天幕だ、やれ毛布だと夜もほとんど眠れず。やがて天候も回復し、天気になると、まずは濡れたものを外に出し乾かさなくてはならず、壁にしている天幕は、ところどころ風を通して乾かすようにしなければならず、それは大変なものでありました。部隊にいるときは石造りの兵舎であったが、こんな山奥で食糧輸送もある程度は満馬の馬車で来るが、途中から馬車も通れず、荷物を運びに行くこともある。

作業現場ではツルハシとスコップでトンネルを掘る者、その土をモッコで担ぐ者、ある班は戦車壕掘り。山奥のため、あるときには食糧も途絶えることもあり、八月十一日私たちは初めて日ソ戦を知ったのです。そ

れは山奥のため、出動命令で山を下り始めると、雨が降り出し、行軍中足元も悪い。やっと大気になり、すると上空より聞き慣れない飛行爆音、敵機来襲、隊長は全員横に散れとの命令をすると上空より紙切れが舞い降りてきた。中には焼夷弾だと叫ぶ者もいる。それはソ連側よりの日本文字で「日本は無条件降伏」というビラであった。それでも全く信じられなかった。

その後、方正で初めてソ連軍と出会い、しばらくして武装解除される。九月二十七日方正県より松花江を水軍船に乗せられ、ソ連軍に監視され、佳木斯の川の中央で夕方船が止まり、白系露人の女性通訳が日本語で、「今夜は波止場の都合で船が岸に着けないので、日本の兵隊の皆さん懐かしい故郷の夢でも見てゆっくりとお休みください、明朝、朝鮮経由で帰国できます」と言われた。それを信用して船内は故郷の話で賑わい、中には町内のお祭りにも間に合うとかで夜遅くまで話が尽きず、夜ふかし状態で疲れてぐっすり寝込み、起床号令で目を覚ますと、何と船は満州の同江というソ連の国境をどんだん進んでいるではありませんか。

部隊長は全員を甲板に集め、「我々はままとソ連の手にだまされた。これからはどうなるか」と青ざめた顔で、「絶対勝手な行動だけは取らぬよう」と言われる。

そして午後一時ころソ連領内のレーニンスキーとかいう所に船は着いた。出迎えるソ連の大人や子供、六七歳であろうか、真綿のような白い髪、茶色の毛をした小さな子供まで竹や木の棒を持ち、口々に「ヤボンスキーサムライ、ハラキリ」と言うではありませんか。そのうちにソ連軍から通訳を通じて、日本人はソ連人に六メートル以上近寄ってはいけないと言いつす。そのうちに出発命令がかかり、どこかで汽車にでも乗せるのかと思いつながら少し歩くと、「ここで皆さんは風呂に入り、きれいな体で日本にダモイです」初めてダモイという言葉聞いた。「風呂に入らない方は帰国できません」と言われ、全員天幕張りのシャワーに入り、出て来たところ、服、ズボン全て裏返しにして時計、万年筆、貴重品は総て取られ、ソ連軍は子供のように両腕に時計などをはめられるだけはめて、ポケット

トには勿論いっばいに詰め込み、中には眼鏡まで取られた人もいた。通訳を通じて眼鏡だけは取り戻し、その眼鏡を面白そうに大のソ連兵が得意そうに鼻に掛け、本当に幼稚なものでした。

そうしているうちにまた、「東京ダモイ出発」と言われた。今度は汽車に乗せるのかと思ひ、全員言うなりに歩き着いたところが農場で、燕麦畑、またもやだまされ野宿の準備。夕方になると大きな蚊とブヨなどに襲われ、夜は天幕の中、外をいぶし、ローソクの火を頼りに、これからどうなるかの話ばかり。ここを幾日か過ぎて午後のこと、急に予告もなく、「今から汽車に乗って東京ダモイ、早く支度しろ」と日本語の片言を言つて、「フィストラ、フィストラ」の連発。しばらく歩くとなる程駅に着いた。ホームの方を見ると無蓋車の貨車ばかり。そのうちにソ連の歩哨がまたもや「ダワイ、ダワイ」と言つて貨車を指差し、無理やり貨車に詰め込まれ、貨物シートを掛けてかなりの時間走り続けた列車も、ブレーキの音も高く停車した。ここで下車することになり、軒並みの多い小さな町であつた。

た。

そこでは線路の近くで囚人が銃剣を着けた看守に見守られ、シューバを着てドラム缶の整理を重そうにしていた。大変厳しそうに監視されているように見えた。さて寒さも一段と厳しくなり、今まで履いていた日本軍靴では過ごせない季節となり、ロシア製のフェルトの長靴と交換になる。そのころピラという地名を初めて知つた。幾日かたつて、今度は二十キロ地点に移動するということになり、指示を受けた班長が十名ほどで行かなければならないとのことで、また私も誘われ、ソ連の歩哨に引率され歩き始めたところ、なんと森林鉄道の跡のようだ。レールも枕木もある、二十キロと言われたがかなり遠かつた。

やっと目的地に着いたが、見えるものは腐つた古ぼけた大きな家。周囲は有刺鉄線で囲われ、四方に高い見張り台。聞くところによれば、革命当時の政治監獄の跡であつた。家の中は床板も腐れ落ちたのか全然なく、その夜は家の中の木の切れ端をかき集め、雪の上に出ている枯草を集めて各自の天幕と毛布を重ね、な

るべく身を寄せ合うようにして寝たが、身が冷えているのと、家の中が仕切りもなく、がらがらなため、火を焚いても暖まらず、眠れず、今でも忘れもしないが、一夜に二十五回も小便に外へ行った。一日三百五十グラムの黒パンも、朝食食わずに残し、少しでも夜小便に行かない方法として夜に回したものです。

四、五日して本隊が到着して大勢の温もりで部屋も何とか暖かくなり、それから二、三日はみんなで落葉樹を切ってきて、床がわりに並べ、算盤のような床の上に枯草を敷いて、それぞれの毛布天幕を重ねた。山に行き長さ二メートルの薪を一人一立方メートルがノルマで、苦しい毎日でした。帰りには、夜自分たちの使うローソクがわりに松の木の根からタイマツ用の木を探してくるのです。ローソクがわりに毎日焚くタイマツで、顔は真っ黒、鼻の穴は真っ黒、目だけが光って、また明日もあの山に行かなければならないのです。体も衰弱し、ノルマもできなくなり、考えたあげく前の日に外のグループが積み置いた木をソ連人の見えないうちに雪の中にかくし、ある時には、長さ四十セ

ンチほどに切ってそれを一番下に両端に並べ、中を雪で埋め、二段目に正常なのを積み、火に当たっているのと、地方人の監督が「ラボーター、ダワイ」と怒鳴りながら来る。仕方なく立ち上がると今度は他のグループが座り込む。まるで雀を追い散らすようなもので、悪いと思いつつも生き延びるために致し方ない。そのうちに地方人の監督と歩哨が喧嘩になり、「なぜヤポンスキーに仕事をさせないのか」すると歩哨は「俺は仕事に関係ない、日本人の監督だけだ」、あげくの果てに歩哨は「仕事はしなくてもよいから座っておれ」とちょっと日本では考えられない場面でもあった。

四月になって上部の作業立入検査があり、日本人が積んだはずの木が全然足りないとのことで、地方人の監督はお叱りを受けたようであった。

やがて雪も溶け、日曜日のある日大変な事が起こった。それは雪も溶け草木の芽が盛んに伸び始めていた。一部五、六人の日本人が、天気も良いので、小川のほとりでセリを見つけ、その草を食べたところ突然苦しみ出し、日本の軍医は、セリの草を食べた者は、すぐ

に石鹼水を飲んで吐き出すように指示。衛生兵たちは、「食べた者は、正直に言え」と言ったが、それを言うのが恥ずかしいばかりに「俺は食べない、食べない」と言っただけ、ものすごい痙攣を起こし一命を断った者もあつたとのこと。その後で石鹼水を飲んで助かった本人に聞いたところ、草を食べたところまでは覚えていますが、苦しんだことは全然分らなかったとのこと。これも空腹を満たすための大きな事故だと思えます。

その後、ソ連側の身体検査があり、一級から四級までの等級がつけられ、翌日一、二級は山に残り、三、四級はキルガという所に移動になり、私は三級でした。らしくして、バプストアーに移動。ここは航空隊の基地で、この農場で働くことになり、キャベツの草取り、ジャガイモ作り、その他、家の修理など、馬扱いなど、いろいろとやらせられた。

それが終わり再びキルガに戻り、今度はキルガから十一キロ離れた所で自動車の丸太積み、そして更にキルガに戻る。そこへ前にバプストアーへ行っていたときのソ連人が来て、今から俺が呼び出す人間は前へ出

てくださいとのこと。一人ずつ連れ出され、大工系、左官屋、馬を扱う者、衛生兵一人、計十人が彼に引き出され、この十人が帰る年の一カ月前までここで働いた。

その間私は二十頭の馬の管理、ソ連の地方人が草を運んで来るのを食べさせる仕事、馬糞始末。そこにはバイナザルトという蒙古系のロシア人がいて大変親切にしてくれた。そのうちに部落民の毎日の配給の食パンを糧秣係の航空中尉のマダムとパン工場に馬で行くのも日課となり、ある時にはマダムの家で昼食を食べさせてもらったこともある。

ここに年老いたお婆さんがいて、日本には親兄弟がいるのかと聞かれ、帰ってみなければ分からないと言うと、日本には原子爆弾が落ちて丸焼けだと言う。手まねで（ブシカ）ウメライ（死ぬこと）と言うのである。そしてお婆さんとマダムは、かわいそうだと言って、自分たちに配給になっている白パンと、主人が吸う煙草であろう、それを持たせてくれることもあつた。その当時、私は煙草も全然吸わないので皆にやった。

そして白パンもいつも十人で食べ、野菜も部落民からもらうので割に自由な生活もできた。

さて、十月中旬、日本ダモイで本隊に復帰することになり、住み慣れた部落民とお別れの時が来た。やがて汽車に乗り、一路キルガへと列車は走り続ける。そのころ本隊では民主運動が盛んであると聞かされた。

毎晩遅くまで討論会を行っている。その中に我々も今夜から入らなければならぬ。十名で自由な生活をしていたので必ず吊し上げが来るぞと皆覚悟をしていた。

夜九時ごろ、本隊にソ連の歩哨と共に着いた。すると、私たちが予想したとおり、全員がスクラムを組んで我々を、バブストアアの反動分子が帰って来た、委員長を先頭に全員「ツケ、ツケ」の連発。昔親しかった友人までがまるで敵である。「天皇制打倒、打倒」と言って、拳を握り腕を高く上げ我々を攻撃。我々の発言は一向に聞き入れない。それを見ていた我々グループの歩哨とソ連側の将校が出て来て「ネリジャ、ネリジャ」と言つて中に入り、「今日はこれで止める、明日の仕事に影響する。サフトラ（明日）の貨車積みで

勝負しろ」と言われ、今日は遅いからすぐ寝るようにと通訳を通じてソ連側から言われ、消灯になったが、私の頭の中は、いかにして明日の貨車積みに勝利をするかで眠れなかったが、そのうちに、いつの間にか眠った。

「起床」の声で目が覚め、各所でアジが始まり出し、我々も負けておれず「今日の貨車積みは絶対に勝つぞ」と大声で叫ぶ。貨車積みと言っても日本のような道具もなく、あるのは太いロープとテコ棒だけ。私は家にいたときに丸太を積む経験が少しあるので、まずは段取り次第と自信を持った。それに我々グループは皆自由な生活もしていたうえ、本隊の者より体も勝っており、力も強く団結心も強かった。

やがていよいよ作業が始まった。各グループは皆真剣である。我々はそれ以上に昨夜の吊し上げもあり真剣である。そうして、やがて、どこのグループにも負けず一番乗りで完了した。そのとき、我々と一緒にいた歩哨が「カンチャイ、カンチャイ」（作業が終わったこと）といって手を握る。作業が終わった後収容所

に帰り、通訳を通じて全員を集め、「バプストアグループはラポート、オーチンハラシヨ」「他のグループは昨夜のアジも口先だけで、口先ばかりの民主主義だ」と言った。それから本隊の彼らも昔に戻り、優しさも増してきて、最後の約一カ月ほどではあったが、またナホトカ（最後の集結地）に着いた。

そしてナホトカで一週間船を待ち、やっと船が入港し、今度こそほんとうに日本に帰れるなと思えました。一人ずつ名前を呼ばれ船に乗り込んだときの嬉しさ、途中船内も静かで何事もなく、昭和二十三年十一月十八日、本年最後の船（朝風丸）で。世話役の方々、看護婦さんたちが出迎えてくださり、シベリアの三年余りの苦勞をねぎらってくださいましたこと、今も忘れられません。

【執筆者の紹介】

角野さんは、大正十二年北海道幌加内の農家の次男として生まれ、学校卒業後国鉄勤務。

昭和十六年長男応召のため退職。実家の農業に従事。

昭和十九年三月北部第三部隊に入隊。

昭和二十年九月入ソ、抑留生活、昭和二十三年復員。

その後、農業経営二十年を経て、昭和四十四年岐阜市へ移住される。

会社定年後、実弟の会社の取締役として現在に至る。本年の財団シベリア慰霊訪問に兄弟二人で参加され、御苦勞をかけました。

現在、全抑協岐阜県連の役員として活動していただいている貴重な人材です。

（岐阜県 鈴木 善三）

シベリア抑留

静岡県 室伏 貫二

私は大正十四年三月、静岡県駿東郡小山町生土にて室伏家の次男として生まれ、昭和六年、小山町成美尋常高等小学校を卒業した。兄は、昭和二十年五月三十日、行年二十六歳で支那廣西省にて戦死した。